

和菓子の歴史

古代の菓子は野山に自生している木の実 果物に限られていた（松の実 なつめ びわ 柿 栗）これらの実を天日で自然乾燥し保存していた

橘（たちばな）を御菓子の起源とする伝説がある

11代垂仁（すいにん）天皇が〈日本書紀では〉田道間守（たじまもり）〈古事記では〉多遲麻毛理に“ときじくのかぐのこのみ（非時香具菓）”今の橘を求めてくるよう命じ、

常世（とこよ）の国【中国南部からインド】に渡り約10年かかり発見し、これを日本に持ち帰るが、垂仁天皇は崩御され、田道間守は半分を垂仁天皇の皇后に捧げ、残りを垂仁天皇の御陵に捧げ、悲しみのあまり泣き叫びながら亡くなったという。

後に聖武天皇（しょうむ）が「橘は菓子の長上、人の好むところ」と言われ橘は菓子とみなされ、

田道間守は菓子の神 菓祖神（かそじん）となった。

右近の桜 左近の橘 正月お供えに橙（だいだい）を飾るのはこの故事に由来している

人工的に手を加えた今の御菓子の原型は 奈良 平安時代に輸入された 唐菓子 が始まりといわれる。唐菓子とは、米粉 小麦粉などを色々な形に作り 水あめ ハチミツで、甘味や塩味をつけ また油で揚げたりしたもので、宮中や貴族で祭神（さいじん）用として用いられ一般には口にはすることはなかった。

現在でも一部の神社（熱田神宮 春日大社 下賀茂神社など）でみることができる。

奈良時代 遣隋使によりお茶が伝わり 宮中で引茶の会が催されたとあるが、本格的に茶を栽培し普及に力を注いだのは 1191年 栄西（よさい）上人が 宋（そう）から茶苗を持ち帰ったことに始まる。

茶を楽しむ茶道が始まり、この事によりお菓子も趣向をこらすようになり少しずつ進化をする 太閤秀吉の桃山時代 利休によって大成された

江戸時代になると菓子は、京都風 江戸風 の菓子からなり、2つの系統がそれぞれ競い合って進歩していった。政治の中心が、京都から江戸へ移るにつれ趣味本位に、向かっていった 優美な意匠（いしょう）になって、菓子の名前（菓銘）も個々に作られ、上生菓子の基礎ができた。

1720年ごろには 桜餅 金つば 大福 せんべい などの生活に密着した菓子が作られ武士や町人にも歓迎され、世に親しまれるようになった。

人の一生と菓子

- 誕生** 生後3日目に大きめのおはぎを近隣にくばる
三つ目のおはぎ
- お七夜(おひちや)** 生後7日目 仲人 友人 親戚 近隣のかたを招いて 命名の披露祝いを
行う
- お宮参り** 赤飯 鳥の子餅
男児31日目 女児33日目に氏神様で 子供の無病息災を祈念する
赤飯 鳥の子餅
- 初節句** 女児は3月3日 ひな祭り 親類縁者から贈られたお返しにするお菓子
桜餅 草餅 ひなあられ 引き菓子
男児は5月5日 端午の節句 親類縁者からおくられたお返しにするお菓子
かしわ餅 粽(ちまき) 練りきりの鯉 引き菓子
- 誕生祝** 生後1年を迎えた初誕生を祝う
一升餅 誕生餅 赤飯
- 七五三祝い** 男児3歳 5歳 女児3歳 7歳 昔は3歳で男女共に髪を伸ばした
ので 髪置の祝い と称した 5歳になると初めて袴を着けるので 袴着の祝
い 7歳になると着物にひもをつけていたのを 取り 帯を結ぶ 帯びとき祝い
(実際には ひもとき) 11月15日
赤飯 千歳飴 鳥の子餅 引き菓子
- 入学祝** 入学を祝って贈られたお返しにするお菓子
赤飯 紅白饅頭 紅白大福
- 卒業祝** 赤飯 紅白饅頭 紅白大福
- 成人祝** 赤飯 紅白饅頭
- 結婚祝** 第2の人生の出発である 社会からも一人前とみなされ承認される
当日披露宴に出席された方にまず 松竹梅鶴亀の干菓子と桜湯が出される
返礼には 記念品と干菓子が用意される この時の図案は 松竹梅鶴亀 掛
け紙は紅白に染め分けた鶴亀を浮きだした模様金文字で寿をあしらい 紅白
の房紐か金銀の水引で引き結びにする
- 新築祝** 上棟式 家屋の骨組みができると建前を行う
投げ餅 赤飯 木目羊羹 末広 扇 鯛
- 開店祝** 赤飯 鳥の子餅
- 年祝** 男女の長生きを祝う日 還暦祝い 干支が一巡りして元に戻る
こと
赤飯 鳥の子餅
- 古希の祝** 酒債は尋常行く処にあり人生七十古来稀なり (70歳)
- 喜寿の祝** 草書体で七十七の組み合わせであるところから (77歳)
- 米寿の祝** 米の字が八十八の組み合わせであることから (88歳)
- 白寿の祝** 百に一足りないところから (99歳)